

「パンエンドスコーピー 上部消化管の検査・診断・治療」

関東通信病院副院長・消化器内科 多賀須 幸男 著

東邦大学大橋病院・消化器診断部

酒 井 義 浩

上部消化管の内視鏡(endoscopy)のために、内視鏡医(endoscopist)の多くは細径前方視鏡を選択する。これはこの内視鏡(endoscope)が被検者の苦痛を最小限とするのに適しているからであり、広い観察域とほぼ満足しうる記録性を持ち、必要な内視鏡治療の大部分を実施しうるからである。かつて囁かれた、“細径＝粗悪品”の域を完全に抜け出して、内視鏡の水準を維持しながら、なおかつ口腔から十二指腸主乳頭まで網羅しうるからである(panendoscopy)。術者にとって、内視鏡を進める方向が見えることほど安堵することはない。内視鏡医だけではなく、一般内科医、研修医にも親しまれているゆえんであり、いまや内視鏡の代名詞でさえある。

本書は、この内視鏡の生みの親である著者が開発の御苦労は微塵も示されることなく、10万回の経験をもとに語られた上部消化管内視鏡術のすべてである。苦しみのない内視鏡を目指して著者御自身が実践されてこられた22年間の結晶でもある。それだけに細径前方視鏡へのこだわりと情熱とが随所に感じられる。

内視鏡は非日常的な負荷である以上、苦しくないほうが望ましく、見落としがあってはならない。本書は13章で構成されているが、約40%

を割いて隈なく見るための工夫が示されている。器材の説明は簡潔にして、むしろチームとしての内視鏡に重要な看護婦、技師などへの暖かい心遣いが示され、術者に対しては写真ごろごろを持った一流カメラマンになれと励まされている。上部消化管の構造については術者としての立場から豊富な挿絵でわかりやすく説明が加えられ、血流や運動についても触れられている。殊に内圧や知覚について著者の体験が生かされている。

また更に「手技の実際」(第6章)では細かな解説があり、重要な部分に下線が引かれている。更に適宜「suggestions」の項があり、実際の忠告が要領よくまとめられ、この部分だけ読んでも大いに教えられる。背中に感じる父親の眼差しのように、慈愛に満ちた助言で綴られている。

補助診断としての色素や生検、治療法も胃瘻造設術に至るまで、原理と留意点とが述べられている。偶発症についても著者らしい心配りが感じられる。

後半は代表的内視鏡像と共に疾患の説明に費されている。ただ単にアトラスにとどまることなく、著者が既に執筆された「胃腸病へのアプローチ」(医学書院)と同様に、巧みに

模式化された説明図で内視鏡像が補われている。前半では青を基調にした説明図も、後半では更に赤、ピンク、オレンジが加えられて、疾患に対する認識を高めるために心憎い演出がされている。しかも、これらの図に記入された1～2行の解説と統計とが病態の理解に効果的で、著者の博学ぶりがうかがわれる。厳選された内視鏡像はいずれも“さすが”と唸られるほどの傑作であり、適度の大きさで小気味よく配列されているので、ついついページを繰る手が早まって、終章まで行き着いてしまうほどである。

最後の21ページは章こそ構えられていないが、様々な項目に関連する重要な文献が列記されている。本文の折々に示される引用とは別に渉猟され、しかも丹念に吟味されており、著者の気概が込められている。

表紙の配色も秀逸であり、表紙の素材まで緻密に計算されているように思われる。“わざ”だけでなく、“こころ”の溢れる好著として内視鏡史に残る1冊であると思われる。

● B5上製 258頁 図106 写真23
原色図317 1994 定価14,420円
(税込) 千400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)